

エールを送る

日本医学会会長・財団法人医療科学研究所理事長
森 亘

かつて、科学技術なるものはすべて善であり、建設的で、ただただ人類に幸福をもたらす手段であるかのように考えられていたらしい。確かにそれは、我々に多くの便利さや快適さをもたらし、富を与え、限りなく新しい知識を授けた。しかし一面、それは多くの危険と害を生み、一部では人間らしさを失わせる結果となったことも否定できない。かくしていまや、科学技術に対しては一つの反省が起こりつつあり、だれもがその有用性、必要性を認めながらも、あまりにも旧来のような科学技術一辺倒に傾くことの危険性を、多くの人々が唱えている。要は、科学技術的考え方、科学技術そのもの、そして科学技術教育の重要性が改めて認識されたと共に、その育て方、あるいはその使い方には、常に人間らしさの裏付けを忘れてはならない、ということであろうか。

同じく、効率的に、とか有効に、といった考えも、今まではすべて善であり、人間社会を健全に動かして行くための重要な基本であると受けとめられてきたように思われる。そして、その際、結果としてもたらされるもの、またそれを得るために使われたものについて論じられる場合には、ことごとく、何等かの物差しで測ることができる「もの」に限られ、容易に測ることの出来ない類の要素はとかく無視されがちであった。医療をも含む科学技術の中で、——必ずしも正確な表現ではなかろうが——上に述べたようにハードのみならずソフトも、といわれ始めた今日、効率のみ、それも目に見える事柄ばかりの効率を追って、それで良いのか、という気持ちが起る。そして、もし仮に、この効率的という言葉と経済的という言葉が、相互にかなり重なり合っているとすれば、科学技術における反省と似たものが経済の中にも存在しうるのかもしれないと思う。経済の専門家たちにお伺いしたいところである。

私自身の体験としてやや異様に感ずるのは、経済学専門の方々が医療を論じられる際に、時として、病院での患者に対する医療と工場におけるものの製造とを同列に取り扱っておられることである。少なくとも、言葉としてはまったく同じ、例えば生産という表現を拝見することがある。これは、我々経済学の素人にとっては大変刺激的であるが、もちろん、心はそうでなく、ただ分析なり考察なりの一過程としてその様な言葉が使われているのであろう。これは、丁度、我々医学者がその研究の過程において患者を材料と表現し、大いに世の中のひんしゆくを買った事例に似ているのかもしれない。

想像するに、医療経済と呼ばれる領域には、国家レベルの医療政策から、個々の病院における個々の診断・治療レベルまで、極めて広い問題が含まれるのであろう。ただ願わくは、それらのすべてについて、とくに個々の診療内容、医師・患者関係に触れるような繊細な問題については、暖かい、人間性に富む広い視野のもとに眺めていただきたい。医療経済なるものの実態を存じているわけではないが、それはもちろん、医療関係者中心のものである必要はない。しかし一方、あまりにも経済学者中心、すなわち経済学の中に新しい、一つの領域を確立することそのものが目的であってならないような気がする。すべてが真に、社会一般、とくに患者たちのためのものであってほしいと念願する。

本誌の発刊を祝し、貴研究機構の御発展を祈る次第である。